

## 憚代英の思想

秋吉, 久紀夫  
福岡女子大学文学部

<https://doi.org/10.15017/18050>

---

出版情報：中国哲学論集. 4, pp.33-47, 1978-10-01. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 惲代英の思想

秋 吉 久紀夫

一九三一年四月二九日、国民党上海竜華警備司令部で、投獄されていたひとりの男が、秘密裡に刑を執行された。かれは死に臨んで次の詩を書き遣していた。

浪迹江湖憶旧游 江湖を浪迹して旧游を憶う

故人生死各千秋 故人の生死おのおの千秋

已擯優患尋常事 すでに憂患をなげうつは尋常の事

留得豪情作楚囚 豪情を留め得て楚囚たらん

（沈葆英「惲代英を憶う」一九五九年七月『人民中国』四二頁。趙瑞麟「左联時期的詩歌」、南京大学中文系編『左联時期無産階級革命文学』一九六〇年三月、江蘇文学出版社刊、二一九頁。蕭三編『革命烈士詩抄』一九五九年四月、中国青年出版社刊、六三頁）

かれの名は惲代英（一八九五～一九三一）といい、三十八歳であった。当時惲代英は、王作霖と変名して、中国共産党の上海、滬東区行動委員会の書記をしていたが、本務は中国共産党中央委員会委員、政治局員、中央宣伝部担当の重責にあった。（沈葆英「惲代英を憶う」。波多野乾一編著『資料集成中国共産党史』第一巻、二二七頁、昭和三年六月、時事通信社出版局刊。王健民著『中国共産党史稿』第一編、五五二頁、民国五四年八月、国立政治大学）この惲代英について、かつて胡華はその編著『中国革命史講義』（中国人民大学中共党史系中共党史教研室編、胡華主編、一九五九年一月、中国人民大学出版社刊）で、次のように評価している。

「一九一四年、帝国主義の世界大戦が勃発したのち、中国の民族資本主義の急速な発展は、封建主義の束縛を打ち

破ることを要求した。中国の先進的な知識分子は、袁世凱の統治のもと中国の暗黒と混乱とに心を痛め、中国の進歩と改革とを要求した。ここに中国人民のあらたな覚醒を代表する新文化運動は、一九一五年創刊の『新青年』雑誌（原名『青年雜誌』）を中心として、次第に発展しはじめた。当時の新文化運動の基本的要求に、三項目あった。すなわち民主を提唱し、科学と新文学を提唱することであった。

『新青年』雑誌は、民主と科学の二面の旗を掲げ（当時はデモクラシー先生と、サイエンス先生を擁護するといっていた）封建文化思想に対して猛烈な戦闘を展開した。……李大釗は青年たちに「過去の歴史の網羅をつき破り、古くさい学説の牢獄を打ち破り」、民主的な『青春の中国』を創造しようと呼びかけて、中国人民の革命的な感慨を表わした。陳独秀は、フランスブルジョワ革命を紹介し、ブルジョワ民主原則を伝播して、専制制度に反対し、科学を提唱し、迷信、盲従、独断の封建哲学・宗教に反対した。当時『新青年』雑誌には、憚代英らの多くの文章が発表され、ダーウインの進化論や、自然科学を紹介し、唯物論や無神論が弘められた。……（二七頁）

十月革命後、マルクス・レーニン主義——ボリシェヴィキの学説が、中国に伝わりはじめた。中国の一部の急進的な民主主義者たち、すなわち李大釗、毛沢東、周恩來、瞿秋白、憚代英および陳独秀らを代表とするひとびとは、十月革命の勝利の歓呼を聞いて、マルクス・レーニン主義を受け入れはじめた。こうして中国に、一群の初歩的な共產主義思想を所有する知識分子が出現したのであった。かれらこそ五・四運動の左翼であった」と。（二九頁）

つまり胡華は、憚代英を五・四運動以前の『新青年』に拠る新文化運動推進のわかい啓蒙たちのひとりと把え、また五・四運動を身をもって挺した左翼のメンバー、かつ中国における初期コミニズム思想を有したインテリゲンチヤのひとりとして位置づけているのである。

もとより、中国における近代思想形成の歴史は、その歴史的状況の追求のみからでなく個々の思想家のそれぞれのもつ独自の思考、心情的傾向からも、総合的に把握しなくては、明らかにすることは不可能なことは言をまたない。憚代英が、かりに胡華の説くようだとしても、その人物の全貌は、現在までのところいまだ詳らかにされていない。

惲代英は、一九一九年五月四日に端を発した五・四運動の際、武昌の中華大学を卒えて、同大学附属中学の教導主任を務めていた。かれは武昌の没落した読書人の家庭に生まれ、先祖は江蘇省武進の人であった。（『革命烈士詩抄』六三頁。沈葆英「惲代英を憶う」）かれの夫人である沈葆英の保存している一九一九年の日記に、次のような箇所がある。

「五月六日、夜、香浦らと伝単を（四年五月七日の事）印せんと謀る。余の擬せんとする伝単文は下の如し。四年五月七日の事、俠氣ある黄帝の子孫よ、尔は四年五月七日の事を忘るべからず。いままた五月七日の来る。あの四十八時間以内に、我を強迫して二十一カ条を承認せしめし日本人が、いままた歐洲の講和会議で、我々の青島を強奪し、我々の山東を強奪し、我々四億人の中華民国を、かれらの奴隸や牛馬となさしめんとす。尔もし人間ならば、尔はなおも金錢をかれらに献げ、盜賊を尔の父とみなすか。わが親愛なる父老兄弟たちよ、我は絶対に信ず、尔が人間性を無みすることなく、この立場に到らんことを。

五月七日、晚峯より信来る。北京の学生示威および各界の騒動の事を叙せり。之を讀みて泣下る。売国賊は萬たび死せども、以て其の辜を蔽うに足らず……………我は願わず、同学が愛國の話を説わざるを。説わざるは心の死せるがためなり。我は願わず同学が、ただ做さざるとのみ説わんことを。そは心底に胆氣の無き徴なればなり。我は願わず同学が極端に趨らざるを。かくのごとからざれば、かれは真の感情も真の知識も有するを見ざるがためなり。…我は願わず許多の冷たからざる、熱からざる折衷論を聴くことを。そは甚だしくは解くを求めずの心理の表現のためなり。」（張豈之整理「惲代英在五・四運動期間の日記、『歴史研究』一九五八年第十一期三七頁）

惲代英はただちに武漢学生联合会工作に着手した。かれの五月十一日の日記には、「学生団（学生联合会）に名を列ねしもの十八校、学生四三七六人、亦湖（原文湘とあり、間違いと考える）北学界にては、破天荒の大出風頭なり」と。（前出四〇頁）

ところで五月十七日付の『申報』には、

「北京よりの通訊が伝わるや、武昌の各大学は起ちて北京の学生の後塵を歩まんと欲せしが、その筋の責任ある各校長が、集会を准さざるのみか、軍警を以て圧迫を為せり、各校の学生は益々憤慨を形わせり。十一日禮拜、武昌中

華大学、高等師範、高等商業専門、……………等十五学校はさきに代表用て結合し、美国教会の弁ずるところの文華大学を仮りて会場となし、集会を举行せんとす。十二時各校の学生の場に到るもの計約二千余人、群情激昂す。……」（龔振黄編「青島潮」、中国科学院研究所第三所近代史資料編輯組編輯『五四愛国運動資料』一九五九年四月、科学出版社刊、七九頁）さらに五月二十四日、六月一日、六月八日付の『申報』（前出八〇〇、八二四頁）にその後の武昌での運動の展開が報道されている。これは憚代英の前述の日記とまったく合致するものである。

また憚代英は当時、黄負生らと『学生周刊』を発行し、さらに黄負生、劉子通、李書渠（伯釗）、林育南らと『武漢星期評論』を創刊し、学生運動、労働運動、女性解放運動などを指弾したが、同時にかれは武昌の横街頭に利群書社を開設するとともに、利群織布廠を設置した。（『五四時期武漢的進歩刊物介紹』、中共中央馬克思、恩格斯、列寧、斯大林著作編訳局研究室編著『五四時期期刊介紹』第二集、四八四頁、四八五頁、一九五九年四月、人民出版社刊。沈葆英「憚代英を憶う」。『革命烈士詩抄』六三頁）

この時期の憚代英の思想を考えるとすれば、さいわいにも、二つの論文が残っている。一つは「物質實在論」（『新青年』第三卷第一号、一九一七年三月一日）であり、いま一つは「論信仰」（『新青年』第三卷第五号、一九一七年七月一日）である。どちらも武昌中華大学在学中の二十二歳の頃のものと思われる。ともに文言で記されている。

「物質實在論」では、

「蓋し天地はもと天地無きなり。山河はもと山河無きなり。形声臭味物境は、もと形声臭味物境無きなり。かくのごとければ、人これを信ずること有らんか。さらに一步を進めて、対談の間においては、明明、尔あり、我あるなり。すなわち謂へらく、尔はもと尔無く、我はもと我無しと。かくのごとければ、人これを信ずること有らんか。

……………哲学者は此の問題に對して、意見初め一種に止まらず、然れども最少の一部分自り外は、吾人と完全の同意を表わす者有るは鮮し。或いは物質は實在なりと謂ふと雖も、然れども其の物質は決して實在となす所以の者は、仍ほおのづから吾人と異なれり。然れば則ちこの問題は、豈極めて研究すべき価値を有する問題たるに非ざるか。」

と前置きして、「黎德（Thomas Reid, 1710～1796）の「絶対實在論」。『狄卡尼（Descartes, 1596～1650）と前置きして、』「康徳（Immanuel Kant, 1724～1804）の「批評實在

説」。巴柏克尼 (George Berkeley, 1684~1753) と謙讓 (David Hume, 1711~1776) の「物質非実在説」を解説する。そして結論として自己の意志をつぎのようにまとめている。

「吾以為物質は必ず実在なりと。何を以て物質の実在なるを知るか。曰く吾人の知覚は必ず感官の外物の刺激を受けるを待ちて後発生するなり。吾人直接に以て外物を見ること能はざると雖も、感官の既に刺激を受けて知覚を発生せしむるに因りて、遂に決して外界には必ず実在の物質ありと爲す。此亦よろしく信すべきなり。吾人の真幻の分に對するは以て天淵の懸絶のごとくなさざるは鮮し。試みに此を懸絶の点と思ふは何に在りや。一つは対象のありて、一つは対象のなきのみ。此等の區別は、無論、何等唯心論者と雖も、均深く之を信するものなり」と。(六頁)

「論信仰」では、

「信仰の人を引きて向上せしむるは、固より誣ふべからざる事なり。かつ其の功用は能く怯者をして勇たらしめ、弱者をして強たらしめ、散漫者をして精進せしめ、躁乱者をして恬静せしむ。歴史の載するところ其の偉大なる成績は、数を俵ぐるべからず。今の人之に震眩して抛棄すべからざるものと以爲るは、蓋し亦偶然に非ざらん。……………道徳上の大動力に三あり、一を信といい、二を愛といい、三を智という(基督教は謂ひて信愛望の三者となす、然れども望は信の内に包みて在るなり)……………信と愛と智は、同じく三原動力の一なりと雖も、然れども信と智とを以て較ぶれば、即ち相形なれど細、信と智とは常に相衝突する物なり。吾人の智は常に吾人の信を破除せんと欲す。吾人の信はまた常に吾人の智を閉塞せんと欲す。然れども吾人をして信に因りて智を棄つるは、これ自ら文化進歩の本源を絶ちて、迷惑愚妄の境地に安んずるなり。それ可ならんか。すべて吾人の信の智と不一致のごときの時は、すなはち此の信は無価値なり、保存するに足らざるなり。彼に種々の有力なる功用ありと雖も、此らの功用を以てせば、吾人を迷惑愚妄の境地に引導するに過ぎず、吾人をして倒行逆施せしめ、自ら進化の門より絶たせ、有益ならしめずただ害有るのみ。」(二頁)と、信仰の力の過去の歴史上での有効性を確認するとともに、道徳における智の必要性を、より強調する。

「智識無きか或いは智識簡單なる人は上に述ぶる所の如く、自然其の較合理的なる信仰を有すれど、然れども則ち此らの信仰は、吾人必ずしも之を破壊せざると雖も、亦決して之を提唱すべからず。蓋し智識無きは進むべくして智

識有るものと為り。知識簡單なるは進むべくして智識高尚なるものと為らん。もし必ず宗教家のごとく、之がために一つの堅固なる信仰を立つれば、則ち異日必ず其の智識進化の累と為るべし。かくのごとくして知るべし、凡そ今日宗教を保存を言い、信仰を提唱する者は皆多事なれど、皆有害無利の事なり。かつ吾人は其の宗教の範圍の智識無き或いは智識簡單なる人をもって、其をして理由なきの信をなさしむるよりは、むしろ教育を以て之を啓発し、其の智をして之を訓練せしめ、其をして之を愛して愈しむること無けん。蓋し智有るは以て其行為を指導し、しかして智と愛とまた共同して之を鞭策せば、則ち自ら能く見善して為さざることなく、しかも為すところ善ならざるはなし」(三一頁)と。

つまり下愚なるが故に、ひとりでに信仰せざるを得ない環境のひとつとを、より智有るものが、教育によりて啓発向上せしむべき道理を披瀝したものである。前者の論といい、後者の論といい、いまだ徹底した社会変革の理論構築は、憚代英の内部において組み立てられてはいない。ただしそれを導入するに足る水路は両者を読むと、容易に理解できるものであった。

### 三

さて五・四運動後、憚代英の触角は、以前より以上に遙かな地点の情報をキャッチしようとして熱望した。かれは一九一九年七月一日に北京で成立をみた『少年中国学会』(『少年中国』第一卷第一〇号五五頁)に湖北武昌から加入届を提出した。(『少年中国』第一卷第七号六四頁)かれの名はすでに識者のあいだに知れわたっていた。フランス留学をしていた曾琦でさえ、中華大学附属中学発行憚代英主編の『新声』の存在を熟知していた。(『少年中国』第一卷十一号五九頁。『新青年』第六卷第三号、一九一九年三月十五日)代英はその頃、新青年社の依頼で、カウツキーの『階級闘争』(Karl Kaweky's the Clase Struggle)の訳をしはじめた。(『五四時期武漢的進歩刊物介紹』『五四時期期刊介紹』四八四頁)この訳は新青年叢書の第八冊として、後日一九二一年三月ごろ広州昌興馬路二十六号の新青年社から刊行されている。(『新青年』第八卷第五号広告、第八卷第六号廣告)

かれは訳した後北京へ上り李大釗と会い、ふたたび武昌にもどると、前にもまして積極的な工作に取組んだ。共存社

を設立し機関誌『我們的話』を発行。ついで互助社を組織し、魏以新、林育南、廖煥星、黄負生、李書渠らと機関誌『互助』を發行し、華々しく社会活動を繰りひろげたが、(前出『五四時期期刊介紹』第二集四八五頁)、一九二〇年一月二二日付の上海『時事新報』副刊の『学灯』に「共同生活的社会服務」を投稿したのもこのころであった。

一九二〇年三月十三日、李大釗は北京大学図書館での少年中国学会の例会で、その編輯責任者に決定したが(『少年中国』第一卷第一〇号五四頁)同じ月、憚代英は北京に到着、北河沿椅子胡同德陞公寓に移り住んだ。翌月四月十日、中央公園来今雨軒の学会例会に出席し、少年中国学会叢書編訳部専任となった。(『少年中国第一卷第十一号』)

こうしてかれの活躍は、全国的な舞台への登場となったのである。これ以後一九二三年八月の『中国青年』編集担当に至る期間のかれの主要な論文をあげるならば、一九二〇年四月の『少年中国』第一卷第十号掲載の「懷疑論」と、同年四月十八日から九月十五日まで、三回にわたって大論戦を揚效春とのあいだに演じた『兒童公育論』である。これは上海の『学灯』紙上で展開されたものである。まず「懷疑論」から調べてみよう。文章は口語体である。ここにも五四運動の文章改革の顕著な変化が、かれにもすでに表われている。さては憚代英は

「私がこの論文に懷疑論と題をつけているのは、關羅(ギリシヤの哲学者 Parthon) 考えを弘布しようというのであろうか。私はピユロンの一切の事理(どうり)に対して抱く懷疑の態度については、大いに賛成である。だがかれの説く真の事理は探求することは不可能であり、かつ必ずしも探求しえないという話に対しては、全く根本的に反対である」と意見をまず提示し、その根拠を、形而上学的、倫理学的、自然科学的な各方面から、検討を加えてみた。形而上学的には、

「私たちは眼を閉じて、自分の身体のおできにさわってみると、とっても大きく感じるが、眼を開けると、かえって実に小さい。いったいこのおできは大きいのか小さいのか。……………このようなことから解かる。私たちが感覚を信じ、ないしある種の感覚を信じることは、自然界を知ることができて、懷疑の余地はないと思うのは、はたしてたよ靠れるものだろうか。」

倫理学的には、

「私たちは道德とは何だか知っているのか。人生の真の目的、真の価値はどこにあるのか知っているのか。浮わつ

いた思想家は、常に道徳とは聖人や賢者の話だとか、世俗の言い伝え、良心の命令などと説くが、道徳とは聖人賢者の話だろうか。……今から十数年前には、尊王攘夷とか、男尊女卑とかいったことを、すべて世俗では天経地義と考えていたけれど、現在では、一切が根底から覆ってしまった。こうみてくると、世俗の言い伝えには、少くとも、その内に多くの反道徳的なところを含んでいるものだ。」

自然科学的には、

「愛因斯坦 (Einstein) の相対性原理 (Principle of relativity) が発見されると、物体の現有速度は増々大となり、同一の力に対して得るところの加速度は愈々小さくなるのが解った。こうして奈端の第二運動法則が説く運動量の変化と力積とは比例をなすというのは、またいさか靠りがたいものとなった。」などと多くの例をあげて立論し、

「私の意見は、一切の事理どうりに対しては、すべて懐疑的態度を堅持しなくてはならない。だが懐疑的事理に対しては、当然探求しなくてはならない。探求した結果、私たちはなおも懐疑的態度でそれに対処しなくてはならないと考える」と結論づけた。憚代英のこの「懐疑論」は、哲学的認識のプロセスとその態度を、かれ自身の内に対して、反芻するように問い正したと云うことができる。それは正しからざる自己の思考を、掃き清める作業とも見ることが出来る。「児童公育論争」について。

この問題がはじめて提出されたのは、『新青年』雑誌の第六卷第六号(一九一九年十一月一日)の沈兼士「児童公育」であった。ついで一九二〇年三月一日付の上海時事新報副刊「学灯」へ、楊效春の「非『児童公育』」が掲載された。楊效春はこの中で、次のように主張している。むろん「児童公育」の絶対反対論である。

「家庭を破壊することはとりもなおさず、社会を破壊することである。家庭は人類が社会を組織する起点であり、社会本能を発達させる中心である。下等動物に家庭がないのは社会のない所以である。鳥や獣が永久に家庭をもたないのも、永久的な社会がない所以である。野蛮人の家庭は、文明人のような落ち着きや、整然さはない、それはその社会でも、極めて散漫かつ密着性がない所以である。……つまり、……家庭は社会文明を交互に伝え、社会生存を維持する重要機関である。児童に忠義、仁愛、謙讓やおたがいの諸々の美徳を養うことのできるところであ

る。だからひとびとは、それを個人を社会化する学校であるという。児童は家庭生活の中心であり、児童を養育することは、夫婦間の感情をことに親愛にさせ、家庭および人生を、ことの外すばらしいものにさせることのできるものである。児童公育は、家庭を破壊させるものである。家庭を破壊させることは、社会を散満、不安、混乱、退化させるものである。」（北京新学会編輯、上海福州路棋盤街転角、中華書局經售『解放与改造』民国九年（一九二〇）八月一日発行第二卷第十五号六七頁転載『児童公育』的辯論）

これに対抗して、憚代英は、四月十八日付『学灯』での反論「駁楊春效（效春の誤植）君『非児童公育』」を執筆公開した。かれの論評は鋭く、楊效春の依拠する社会観を指弾した。

「社会は家庭に靠って発生し存在するものでなくて、社会本能に靠って発生し存在するものである。社会本能の発生とは、つまり人類が自覚的あるいは不自覚的に、環境に適應する進化によっておこるものである。楊君は家庭は社会本能を生起させる中心と説いているが、やはり家庭は社会本能から生起、發展するのではないか。もしそうでなかったら、家庭は何から生起するのだろうか。」（『解放与改造』第二卷第十五号、七三頁）

ふたたび、楊效春は頑強に非児童公育論を書き、五月五日付『学灯』に送った。「人間にもし社会的本能がなければ、人類はただ個別的な家庭があるばかりで、団結した社会はない。社会組織の要素は、もとより社会本能である。ただし人間の本能とは、この一種類だけでなく、ただこの一種類のみあって、けっして社会を生起させることは不可能である。夫婦がいて、はじめて父子、兄弟、朋友、社会があるのである。もし人間に男女の性と、子を親しくする本能がなければ、人類はとっくの昔に絶滅していて、そこに社会があるだろうか」と。（『解放与改造』第二卷第十六号、一九二〇年八月十五日、七一頁、転載「児童公育的辯論」）

またして 代英の長文の反駁論「駁楊效春君非児童公育」が、『学灯』の六月十一日から十四日、六月十六日から二一日にわたって掲載される。かれはここで社会發展史での社会の形成変化、母系社会から父系社会への發展が、その唯物的、経済的理由を基盤とする事を、Engels の『家族・私有財産および国家の起源』を引いて解説し、社会観を次のように集約した。

「結局いわゆる社会には各種の形式の社会がある。いわゆる家庭にも各種の形式の家庭が存在する。楊君の第一形

式の家庭こそが人類が組織した最初の形式の社会の起点だという説には、事実多くの理に合わないところがある。もし必ずある種の社会を「社会」だと考え、ある種の家庭を「家庭」だと考えるのであれば、無論話し合うことは可能である。しかし私はやはり理想的家庭が理想的社会の起点だとは信じない。理想のない社会は、ついには完全に理想的な家庭の段階に達することは不可能だから。そのうえ、理想的社会は、常に家庭をもたない人々の多くの努力に依存しているためである。その基礎は、名分関係や血統関係の家庭というよりは、相互理解と自由結合の小組織をいうにこしたことはない。(八二頁)……………結論づけていえば、私の考えは、世界のすべての改造をみることを願っているのである。すなわち、人類は経済的に平等で、それぞれがその能くするところを尽くし、それぞれが求めるところを、取るようにならなくてはならないというのである。なぜならこれこそ、各種の問題の根本的解決であるから家庭は私有の産物であり、妻子は必ずその戸主の扶養にまたなくてはならない。そのため妻子は経済的に独立することはできなくて、戸主はまたはなはだ負担が重く、永遠に経済的圧迫の下で苦しむのである。それで婦女をして独立させようとするならば、児童公育によつてはじめて、現在のこの悲惨な文明的社会から、徹底した解放に進みたることが可能なのである」と。(『解放与改造』第二卷第十六号一〇一頁)

論争はまたも、楊效春の六月十五日付「答憚代英君再駁非児童公育」(『解放与改造』第二卷第十六号、一〇三頁をさそうが、すでに旗色は鮮明であった。

ところでこの一九二〇年八月、中国共産党成立準備会が上海フランス租界環竜路漁陽里二号で開催され、發起人七名、内訳は陳独秀、戴季陶、沈玄慮、陳望道、李漢俊、施存統、俞秀松であった。陳独秀が書記に就任、一年間の準備期間において翌一九二一年七月、第一回全国代表大会を、上海フランス租界貝勒路の李漢俊の家並びに嘉興の南湖で、一週間開催された。この第一回代表大会までの一年間、北京、漢口、長沙、広州等に前後して支部が設置され、組織の拡大が展開されはじめた。北京支部は一九二〇年九月に、北京大学教授李大釗を中心に結成された。黄凌霜、華林、王竟林、張國燾、鄧中夏、羅章竜、劉仁静らであった。天津では張聞天、周思来、鄧穎超、韓致祥らが、広州では、譚平山、陳公博、林祖涵、阮嘯仙らが、湖南では、毛沢東を中心に何叔衡、郭亮、楊開慧らが、そして湖北では董必武を主に李漢俊、陳潭秋らがそれぞれ支部を結成した。憚代英が入党したのは、このころである。(前出『中

#### 国共産党史稿』三一頁)

恐らくその直後と考えられるが、惲代英は武昌での五四運動当時の若い友人である李偉森を伴って、安徽省第四師範(宣城)に赴任した。かれらは農村教育を改革する七〇余名の進歩組織を成立させた。さらに一九二二年、またも李偉森を伴って、四川省瀘州に創設された瀘聯合師範へ転任、ついで同じ省の成都高等師範学校(校長吳玉章)へ移った。この間、湖北省黄冈で挙行された青年組織聯合代表大会に出席、この会には毛沢東の長沙文化書社代表も参加した。(「左联時期文芸界烈士伝略」『左联時期無産階級革命文学』一九六二年三月刊、南京大学中文系編、江蘇文学出版社、三三〇頁。沈葆英「惲代英を憶う」。陳農菲「憶念李偉森同志」『左联五烈士研究資料編目』一九六二年十月、上海文芸出版社刊、一六三頁。『革命烈士詩抄』六三頁。波多野乾一編『資料集成中国共産党史』第一卷二二七頁。『中国青年』第四期、一九二三年十一月十日「救自己」。霞山会編『現代中国人名辞典一九六六年版』吳玉章) こうして一九二三年八月、上海で中国共産主義青年団第二回大会が開催された。惲代英の任務は、その後この工作に移行するのである。

#### 四

「中国共産主義青年団は、一九二〇年八月に上海の八人の社会主義者たちが、社会の改造と主義の普及のために結成したのが、はじまりである。その後一九二一年五月に、内部の争いで一時解散、十一月に再建、第一回全国代表大会を、一九二二年五月五日広州で開催していた。(其類「中国共産主義青年団五年来的奮闘」『中国青年』第九三・九四期合併号、一九二五年九月七日)

中国共産主義青年団が、中国共産主義青年団と改称されたのは、第三回全国大会の一九二五年二月である。一九二三年二月七日、上海大学が静安寺路西摩路に開学された。(一九二五年五月三〇日以後は閩北青雲路に移る)校長于石任、副邵力子、社会科学主任教授瞿秋白、教授陣鄧中夏、沈雁冰(茅盾)、田漢、等であった。上海に来た惲代英もその教授となった。(前出「中国共産主義青年団五年来的奮闘」。中夏著『中国職工運動簡史』一九四九年九月、人民出版社刊、二五六頁)

一九二三年十月二十日、中国社会主义青年団は機関誌『中国青年』を上海、中国青年社から発行しはじめた。十一月一日に上海書店が民国路に創設されたので、第五期からは同書店が発行所となった。同時中国共産党の主要工作は、この青年団活動にあったので、青年団担当は最重要機関の一つでもあった。当初数期の『中国青年』編輯は、鄧中夏が担当していたが、やがて全面的に恠代英に交代した。かれは中国社会主义青年団中央委員、同中央宣伝部長、中国社会主义青年団中央委員、同中央宣伝部長、中国社会主义青年団総書記として激務の工作に従事したのである。一九二五年五月三〇日の五・卅運動の時期には、全国学生联合会中国共産主義青年団総書記として、その渦中の指導者の一人であった。またこの間、国共が合作し、かれは一九二六年一月、国民党二全大会で、中央執行委員会委員に当選している。同年二月、広州の黄埔軍学校主任政治教官として派遣された。さらに同年五月、広州第六回農民講習所の指導をも兼ねて、「中国史概要」を講義している。この三年間に、かれは青年団機関誌『中国青年』に息もつかぬ程の論説を書いた。また次のような著書を刊行している。『反帝国主義運動』、『反対基督教運動』、『平民千字課』（各地平民学校教材）以上上海書店刊。『中国国民党与労働運動』、『中国国民党与農民運動』以上広州中央軍事政治学校刊。『中国民族革命運動史』中華全国总工会省港罷工委員会編印、恠代英講などがある。（前出「中国共産主義青年団五年来的奮闘」。徐白民「上海書店回憶録」、静「第一次国内革命戦争時期出版物簡目」、張静盧輯註「中国現代出版史料」甲編、一九五四年十二月、中華書局刊、六一頁、六二頁）『資料集成中国共産党史』第一卷二二七頁。『革命烈士詩抄』六四頁。波多野乾一「毛沢東と中国の紅星」昭和二十一年八月、帝國書院刊、一六七頁。『中国共産党史稿』一一六頁。『中国青年』第四卷五九一頁。『第一次国内革命戦争时期的農民運動』一九五三年十月、人民出版社編輯出版二二三頁。）

さてこの慌しい時期のかれの思想をまとめてみると、五項目に要約される。

まず第一が「反国家主義論」である。代英は一九一九年の五四運動時期には、まだ『われら黄帝の子孫』意識が濃厚であったが、『国家主義者的誤解』（『中国青年』第五一期、一九二四年十一月一日）では、徹底的に否定し去っている。さらに余家菊、李璜二、陳啓天らの「醒獅派」に対して、その時代錯誤性を鋭く糾弾している。（「評醒獅派」『中国青年』七六期、一九二五年四月二五日。「答醒獅週報三十二期的質難」（同八二期、同年七月十八日。））

で張子柱、曾琦、李瑄卿らの新国家主義者にも烈しい批難を浴せかけている。（「与李瑄卿君論新国家主義」『中国青年』七三期、一九二五年四月四日。「国家主義与新国家主義」（同、九八期）かれは「国家主義者はどうしても国家観念でもって階級意識をおし倒そうと思っている」（『答醒獅周報三十二期的質難』）と分析している。

第二が「宗教否定論」である。かつての「論信仰」の延長線上のものであるが、一層その理論はきびしさをともなっている。特に射る矢は基督教にあわされている。「基督教与人格救国」（『中国青年』三期、一九二三年十一月三日）「我們為甚麼反对基督教？」（同、八期、同年十二月八日）、「耶穌的力量」（同、一〇〇期、一九二五年十月十日）そして最もまとまった論として「耶穌・孔子与革命青年」（同、一二〇期、一九二六年五月二二日）があげられる。これは広州の嶺南大学での演説文である。

「かれら（教会中の好人）は明らかに中国民衆が、帝国主義の軍閥の脚下に踏まれているのを眼のあたりに見ている、ただ平和で忍従の教訓を守りつつ、帝国主義の軍閥の脚下に蹂躪されている中国民衆に向って平和と忍従の道を説く、……わたしは我々の中国同胞がこのような人によって蹂躪されているのを見るに忍びないがために、基督教に反対するものである」と。

第三は「女性解放論」である。これはさきの楊效春との大論争であった「兒童公育」論の発展である。

「われわれはただ全体の解放があるだけで、個人の解放はないことを知らなくてはならない。……われわれの唯一の希望は、すなわち真の自己の解放を求めるために、献身的に社会の爲になすことのできる女性たちを見つけて出して、この種の工作を担当させることである。」（『婦女運動』『中国青年』六九期、一九二五年三月七日）

第四は「革命文学論」である。

「わたしは現在の新文学が、もし国民の精神を激発せしめることができれば、それをして民族独立と民主的革命運動に従事させれば、当然一般人の尊敬を受けるはずだと考えるものである。もしこの種の文学が、ついに八股文のように無用にすぎないか、あるいはまだ悪い影響を生ずるようであれば、われわれは必ずしも、それがいかなる文学上の価値を所有しているかを尋ねることはない。われわれは八股文に反対するように、それに反対しなくてはならない。」（『八股？』『中国青年』八期、一九二三年十二月八日）

「無論、先に革命的感情があつてこそ、はじめて革命文学はできるものである。」（『文学与革命』（同、三一期、一九二四年五月十七日））

第五が「革命実践論」である。これには「列寧与中国的革命」（『中国青年』十六期、一九二四年二月二日）、「何謂国民革命？」（同、二〇期、同年三月一日）、「中国革命与世界革命」（同、三五期、同年六月十四日）などの文があるが、「革命勢力与反革命勢力」（同、八三期、一九二五年七月二三日）に、特に鮮明にあらわれている。筆名は但一を使用する。

「なにが革命の勢力であるか。第一は労働者である。……第二は学生である。……第三は小商人である。……第四は農民である。……第五は兵士である。……かれらはみな社会で比較的地位のないものである。ただかれらのみが常に革命の力である」と。<sup>エネルス</sup>つまりこの中には民族資本家や、進歩的知識人が含まれていないことと、革命の主力が、第一に労働者、第二に学生と規定されていることである。農民は第四の順位として把握されていたことは注目に値する。なぜなら、後の毛沢東の主張、実行する中国革命は農民革命だとする思考とは、一九二五年時点とはいえ、明らかに異相であるからである。

ところで孫文の没後、指導権を確保した蔣介石による北伐軍が、一九二六年七月二六日、広州を発進するや、惲代英も湖北省政治委員、並びに国民革命軍總政治部秘書長として従軍した。一九二六年秋、故郷武昌で亡妻の妹である沈葆英と結婚、一九二七年春には武漢軍事政治学校主任に就任。同年八月一日の南昌起義に参加、革命委員会メンバーに名を列ねた。八月七日の中国共産党會議（九江）に出席、ボロジン、ロイ、陳独秀による日和見路線を否定、瞿秋白総書記のもとでの中央委員となった。南昌から部隊とともに南下、十二月十一日の廣州コンミュニオンを指導、崩壊後香港にて党秘密工作に従事していたが、一九二八年秋、上海へ呼びもどされた。（前出『毛沢東と中国の紅星』一六七頁。『革命烈士詩抄』六四頁。『中国共産党史稿』二〇九頁。『資料集成中国共産党史』二二七頁。沈葆英「惲代英を憶う」。『解放与改造』第二卷第十六号九八頁）

以上を願つてみるに、惲代英は胡華の言うように、五四以前の新文化運動の啓蒙者で、中国における初期コミニズム思想を受容した知識人の一人であるとはいえ、そのみに止まらず、五四運動後、社会実践とくに教育文化工作

の分野で、中心的な指導を果した人物であったといえる。無論その理論並びに実践は、陳独秀、瞿秋白、李立三時期という一九二〇年から一九三一年の右傾と左傾の動乱のなかで、革命主力に農民を立てえなかった偏向はあるものの、「わたしは信ずる、肯えて自己を犠牲にして良心に従えば、意志はますます強固になるものだ」（『少年中国』第一卷第十二期、一九二〇年六月、六二頁）という変革精神は、時々刻々光芒の如くその人生を貫いていたのであった。

（一九七八・六・三〇）